



武家閑談
乾



曾
775
104

衮家劇談序

古曰談何容易也。學稼而圃對園，夫庸鄙
猥褻而里巷嬰孺，何其下哉。若夫及談天
下大計，大章則非眼空一世才，拔群類者
不能也。何者？英士雄人，林林然駢首於彼
蒼之下，苟口端不公心，畫不令則寧就其
羈絆而耳。月且耶故不才者，往往喑嚅而
退日出之地，風氣勁烈，况
昭代以止戈奠鼎，嚴乎東方之強也。侍衛



之貧木村高敦材武踰人馬御絕倫加以
好學多年讀譜牒野史極熟於是開口快
談百年之前所以

神祖之囊括天下與所以雄候齊夫之歎
愾獻誠座上夙生群月琅璫然矣先是
武德叢談一書取之刊訛謬歸真正題為
武家閑談續以後編二十卷其譜法及回
志諸人事詳凡例其言曰近來作者編々
皆是莫比吾業也傳聞者必本遵人詳載

者盡存家乘今緝熙百年文運大振若有
周南著作之興則此編亦應備參計表非
一狐樂豈一鰥賢者無乃斟吾勺水乎余
曰子不為大史公而為世本國策耶七十
二國書雖聖不却稗則稗矣請進諸道也
利蠶決當世之務在廬定鼎足之分嗚呼
誰知其蓄哉而終為一代之傑談者則謀
謀者則談余固不欲以閑談視吾子也

武家関係巻一 第一

大正二年一月廿五日
中村権雄氏贈

一 松平が家相の相續徳昌公成り奉りむ人の物終ふ

家康公ハ天文十二年十二月廿六日之別駕行城之由後

生誕成り此由相續月二十月と云々は母と州屋の城より水師

奮つて更なる忠政の消息女なり水師と信元同和

氣音忠重の由緒あり後小傳通院部と云々

家康公の童名ハ竹中代徳と稱し 天文十二年辰二月

二日辰卯父康忠を死す而後想ふ

神くは祈りて世に成すものなり

新編の海に子代竹の篇

右新編と金の經天の書松平が教を付て奉りて忠と云々

主はく松尾頼朝やあけりしん 西子孫徳昌は言也

治承内平の入海はさく 江戸徳昌は形

此懐略と頼朝は去る者も言ふ所は成は河より

世は頼朝より天正十八年 家康は江戸御殿

中務の所より世より八松年の所家康は入京

徳昌あはくしと申りし也

一 家康は初めより徳府の成徳府今川義元の妹嫁

頼朝長持と尾張の太言城の言定城田信長は押

り信長より岩坂梅は言城と對城と丹家の塚は

水野常の山口海を越松柱を青と並谷照寺城は

依久言は京中持城と松門平は美譽津城は尾

正江寺同徳信寺と頼朝は又徳根城と依久同太言と頼朝

て太言城は言合言外平は城舉母城廣津城と云

五信長下知して云若今川方より太言城は言根と入

徳津丸根城一手先より通るは八あり貞と云

之貞と云八守は舉母廣津の三城は迷了大言者

池集一丹家の中持二城の言は徳根徳津は後徳は

后と云く依く徳元より大言城は言根入事

叶は太言城中頼朝より徳元は 家康は依と

主大言城は言根入事と云河内と云永禄二年

四月十日大言城は言根と入んと云言より言支度より

是所より打立は酒井と云印 西親 徳昌は 同少の印

警保の古城に後切の竈火とてつく大なる表を捨て寺の
柵垣へ助束まりは所謂先葉に不慮りてとて今迄
是と云く警保は根小人救なり一葉はを根と大なる御へ
入るべきく功とを一か所常世なり一ははに神迷と
表なりや人の不及る宗不名の道よりして不守而を
攻るは是皆由る大なる名根入んとてなき寺の柵
垣と攻るをよりし殊列の塚くぬもなきより一宮は家
を物の古とゆひはは初より臨終寺の柵小
便りなき書と読るひはは加の敵敵生れ
の名將仕年を帝後初めとて威一なる是と大なる
名を根入るとして守柵初めとてなき入り

一中村或能の柵一氏に秀者公出なるとして一二は常の
かゝるたす助束ぬと一氏よりわたりてしは後に一皇子
息は太のむとて能の柵と考とて秀者公とて自合敵の海に
紀列根来難有ともくして一氏とて別名初由り
一はは金と名のと侍わし海に付たわの加つたてぬ
一はは夫則春地洞賀山六家政後号河津島思向長政
以所松代後高宗命ねり終りて時政南将侍師生約雅示
甲州又流あり既親政次より一はは秀者公の御代は正徳三年丙子八子
斗とて首初由り一はは根来難有と一はは一打てて首初由
り東南より流地城武田中津台寺と梅原初由り
一はは天正十二年尾張内府信維公信維公二男一

家屋を以て傳へて去るを以て此の義も成る月九日去る
尾別義向とて大坂に立寄るに徳川義之信雅の
より井上如也と云ふ使へて根来義兵一揆に大坂の城を
其義を尾津に告げ根来義兵一揆に大坂の城を
うはをと此の義三月十八日二万斗とて尾別一揆
若和向一揆の義兵一揆に大坂の城を
被とて傳へ一氏下知とて大坂の城を
使次と尾津にのびる夫れよりうはを
より二人も不が國侍と云徳川印巻 貞成 貞成は尾津に
立寄る
十七歳より此の義一揆一揆とて大坂の城を
はく余の義兵一揆の義兵一揆とて大坂の城を

はをりて去るを以て此の義も成る月九日去る
尾別義向とて大坂に立寄るに徳川義之信雅の
より井上如也と云ふ使へて根来義兵一揆に大坂の城を
其義を尾津に告げ根来義兵一揆に大坂の城を
うはをと此の義三月十八日二万斗とて尾別一揆
若和向一揆の義兵一揆に大坂の城を
被とて傳へ一氏下知とて大坂の城を
使次と尾津にのびる夫れよりうはを
より二人も不が國侍と云徳川印巻 貞成 貞成は尾津に
立寄る
十七歳より此の義一揆一揆とて大坂の城を
はく余の義兵一揆の義兵一揆とて大坂の城を

因と清しく春和同(入)入るすふの書あると(し)ましく
唄へ珠の流るるなり介(う)管を(一)と云志徳八甲の流
と云りなり(一)ら(う)管上中下(一)なる山(う)書
子と(一)河(一)也唄(一)区(一)り(一)書(一)子(一)唄(一)区(一)也(一)存(一)留(一)
然(一)入(一)中(一)書(一)子(一)ふ(一)し(一)而(一)一(一)致(一)守(一)り(一)上(一)と(一)云
志(一)徳(一)守(一)て(一)ま(一)り(一)と(一)云(一)上(一)と(一)云(一)此(一)而(一)一(一)致(一)守(一)り(一)上(一)と(一)云
それ(一)も(一)そ(一)の(一)人(一)も(一)亦(一)討(一)死(一)必(一)定(一)し(一)る(一)者(一)と(一)云(一)志(一)徳(一)十(一)七
歳(一)多(一)れ(一)と(一)別(一)の(一)者(一)有(一)る(一)鳥(一)を(一)求(一)討(一)川(一)原(一)の(一)松(一)守(一)子(一)な
ま(一)は(一)ま(一)修(一)刀(一)と(一)振(一)て(一)令(一)打(一)一(一)志(一)岩(一)八(一)揚(一)高(一)と(一)討(一)死(一)を
て(一)と(一)と(一)云(一)れ(一)て(一)座(一)の(一)士(一)卒(一)ひ(一)り(一)と(一)云(一)心(一)切(一)流(一)流(一)の(一)海
城(一)友(一)兄(一)也(一)余(一)も(一)と(一)兵(一)船(一)押(一)立(一)大(一)伴(一)入(一)押(一)立(一)り(一)志(一)徳(一)も(一)

余(一)下(一)人(一)と(一)

翌(一)百(一)三(一)十(一)余(一)を(一)り(一)小(一)船(一)を(一)れ(一)た(一)海(一)に(一)て(一)叶(一)ハ(一)一(一)突(一)て(一)お
一(一)致(一)と(一)下(一)と(一)云(一)田(一)賀(一)并(一)別(一)少(一)社(一)山(一)又(一)と(一)志(一)下(一)知(一)一(一)と(一)
松(一)守(一)子(一)志(一)徳(一)三(一)年(一)形(一)より(一)上(一)り(一)此(一)と(一)法(一)院(一)と(一)て(一)打(一)ま(一)く(一)め
志(一)徳(一)も(一)ふ(一)り(一)十(一)余(一)と(一)松(一)守(一)を(一)死(一)と(一)知(一)り(一)は(一)志(一)徳(一)も(一)云(一)田(一)賀
并(一)た(一)者(一)也(一)と(一)法(一)院(一)を(一)守(一)る(一)事(一)也(一)と(一)志(一)と(一)云(一)れ(一)り
合(一)致(一)始(一)り(一)法(一)院(一)を(一)と(一)志(一)徳(一)海(一)人(一)也(一)と(一)云(一)れ(一)り(一)と(一)討(一)死(一)區
身(一)を(一)殺(一)す(一)は(一)志(一)徳(一)も(一)云(一)浪(一)防(一)の(一)芝(一)も(一)子(一)も(一)う(一)鉄(一)砲(一)と(一)云
勢(一)打(一)ま(一)る(一)法(一)院(一)を(一)と(一)打(一)負(一)を(一)死(一)に(一)沖(一)へ(一)引(一)退(一)又(一)志(一)ん
根(一)の(一)け(一)い(一)と(一)一(一)氏(一)の(一)志(一)徳(一)も(一)初(一)め(一)ら(一)る(一)と(一)云(一)付(一)人(一)氣(一)も(一)有
志(一)徳(一)元(一)と(一)好(一)評(一)也(一)志(一)徳(一)一(一)玉(一)侍(一)守(一)向(一)又(一)志(一)徳(一)松(一)浦
安(一)史(一)也(一)志(一)徳(一)二(一)十(一)余(一)と(一)志(一)徳(一)も(一)志(一)徳(一)も(一)と(一)云(一)れ(一)は(一)志(一)徳(一)も(一)

を丁として決蓋る處と云甲は流と云わする下押立等相
田の隙を打てり先(初まり)る二に於先總ハなす後と
う(り)らるる者置れる下等初より押おしり初め式
初め痛くおちりしと後と云はる二にの先勢勇進て一
万石子余の元別堀(初まり)る者一ふしせき將軍として
七に附城(初まり)る者一ふしせき或は方勝と云て
初め(初まり)し等と云一七第別て追討はる中
村の城(初まり)る者一は是と云はる攻戦此合戦は向古敵十
軍集てて先(初まり)る者一は是と云はる言を討文と云はる
よそは初め家系常山後利安と能を打初りり明石
は追と初め時(初まり)る者一は是と云はる言を討文と云はる

敵一(初まり)る者一中山は平次以下將軍討死一氏ハ
兵夫川毛惣兵衛(初まり)る者一は是と云はる一追討母藏内
河原も初め(初まり)る者一は是と云はる一追討母藏内
松浦も初め(初まり)る者一は是と云はる一追討母藏内
かくて先(初まり)る者一は是と云はる一追討母藏内
終(初まり)る者一は是と云はる一追討母藏内
これ(初まり)る者一は是と云はる一追討母藏内
是(初まり)る者一は是と云はる一追討母藏内
初め(初まり)る者一は是と云はる一追討母藏内
初め(初まり)る者一は是と云はる一追討母藏内
初め(初まり)る者一は是と云はる一追討母藏内
初め(初まり)る者一は是と云はる一追討母藏内

しして金銀を打掃り先におまじふを待た
きお池の書はな物にあまきお八河から山手塚
河原より三橋を教まき人教二万斗かけ身り
一氏籍本の兵を教まき西へ大坂より加藤の身り
切しる妙よおまきして此列一揆をきり一氏先
も七方へ此の旗本に終る百斗をり考案する
中村考案つ流戸に決小堀まき荒も一百万斗の款
も道何しそ待利をまき^物いま^物十町余ま
ゆわおまき考初回へ西へ入一揆に口まき是見
信一氏かお不効な物の何心弱くして城へ門に
進めしる先もいまき教まき根城とらまき

そのそのうへ一揆は百万もあまきえも三人切るせ
二お先之書同は款をき一部は使せまき款の一
回にかかりわらる市と流りきこの池とまきあ
高安坐の馬下押え終る百斗まき九千の款と流
うけい一氏下知してしるまき宗馬とまき初回へ
りし一久馬と流り重河の門に逃しるまき未流
ぬまのこまき一氏に床机は福とらけ静まき
物まき一揆をい一氏り小堀とまき平然とまき
初初一教まき流しと流る二里まきへうらぬま
先も七方斗流まき人まき多勢見へまき或戸
旗本へかりの必定款まきまき成せまき

長政増進の政系松崎政の不在近き寺田又
松浦安美志瑞奈常も留款と出控く事先
く一氏族本(然病)半(雲)新あり
一氏兵を為井流人市橋監物近友たを天
和泉玉侍の沼野主格も存相同より如年一氏
兵も留おぬと作り侍けは新友勅為の精
兵好子密をれ物とさうましく教ふ松崎
乃の同子負死人まうは松崎は保りそりか
一氏打えてらの老もは松崎夫能と勅為
酒せと下知して夫と相号算来と務りて
く不勅為の前も松崎は門流の射をせりた

何別より先より馬田中政増進の系松崎
人寺田松浦志瑞不世く小を自はる内小一
氏旗本女子才小松崎馬田孝澄入道也水は坂
西島吉松成一孝和因表大敵出で松崎は
馬田と字一子十歳とて故地とて心りた
かりし松崎七首余とて大坂より親有一氏旗本
と松崎と款の後(は道)とて一氏とて取て
かりしと下知すれは唐村より松崎一房小三より
三川と松崎と入りの松崎九子余一とてありとて
松崎信定の長政は松崎打たる首一と松崎は
松崎先より松崎信定は松崎とて松崎は松崎

首下打取合二り名なり威来栗山備後も人徳首
と河ねたも徳宗意の望一色杉母五川助重も先
手より強志は敗軍は款も人徳能を討た
玉向水の子息長政も夷薩沙の相威も張の丸ふ
まは擲さる麻毛の弓小宗とく池田りとい付く
細い雲米をりく勢勇て快合よかりぬ敵軍
河敷わしく勤く少遊ある也をくそ八百九千
余も討たたり一民の支度は軍も勝此も子能柳よ
て秀吉も弟付出着降へり今威を斜一民も此
威杖一民も来川毛也也 五川助重の望一色
杉母藤内匠下も威杖りり是と尊和向も合取

中川也井大徳氏利徳も来五川海も其の相治り
毛の五川助重の子息也也免書とくそ不令とて
守りぬ在在肉由流式部も来徳合七人威杖りり
此内寺向又意の相之年也其大徳も秀吉も其
河敷一の夫もそ討た杉母也也秀吉も馬也りも
二万石りり石向流も少一味して代見城一書もして
武者と取しりり実も此一取の後作行也其も此
能ケも宣家も成段の河敷も其も其も打果し其も
其子も其も其も其河も其も其も切後子孫も
絶志徳宗意の望一色杉母五川助重も先
手より強志は敗軍は款も人徳能を討た

後、紀州相宣の孫が病死し、その子なくして、徳治の二氏
が、東の人、一色相母の孫、林瀬川を討つた
その孫、八幡原の孫、今も、お磯、石川、助、重、の、後
浪人として、池田輝政へ参上、存内、近江、細川、忠、興、へ
参上、孫、今も、より、内、近、江、忠、興、と、参、上、石、川、と、領、す
川、乞、取、集、つ、後、は、備、後、と、一、氏、の、子、中、村、伯、耆、と、一、忠
を、其、所、何、に、徹、り、以、答、り、と、内、近、江、若、狭、と、小、出、の、後、伯、耆
乞、に、種、族、の、名、物、と、い、く、山、中、塚、と、も、乞、と、を、方、と、も、物
と、い、く、其、な、り、と、い、ふ、也

一 中村伯耆守一忠の城、夷及軍を討つて、池の事、一
希くと、参上、又、参上、の、由、一、氏、根、本、難、攻、め、押、入、泉、別

岩和向の城、よ、う、た、根、本、難、攻、め、一、揆、は、泉、別、(打、上)
回、中、難、攻、め、寺、中、石、城、中、深、の、城、と、推、六、番
よ、う、た、て、岩、和、向、と、い、ふ、今、も、一、年、お、あ、り、同、十、三、年
の、二、月、と、毎、日、の、軍、を、も、も、と、申、す、池、は、一、と、な、り
不、謂、天、正、十、三、年、三、月、十、六、日、小、本、川、と、一、戦、の、時、式
形、も、前、も、て、成、合、年、集、つ、神、谷、年、集、つ、林、つ、ち、又、と、人
池、と、今、も、よ、う、た、と、い、ふ、山、上、す、ま、又、榑、山、寺、回、池、池、物
寺、回、又、寺、回、池、池、物 回、池、人、池、と、今、も、い、ふ、本
の、池、も、り、即、ち、三、年、の、内、池、と、い、物、を、い、く、池、と、い、
り、い、く、也

一 天正十三年二月尾羽小坂津の河秀吉公の軍勢の

濃江打田より西入太夫先の本戸の是り夫倉へより小
ね山と見えぬ言山を以て小ねの家原方へ柳原
城んとありていふ地はのちの中へ宮内あり
城と云ふ一打果んと思ひ切らるるありて二万石の人
敷と修く小備の後へ城とありて柵と柳ありて一
是も不測極く致す一城とて坊地言方原家と
その用事いふことと書物と記すをいふに付言山
智也雲一と此城は此用より成ふ本一とていふ
秀吉公仰て不令本一と付く此城言山中に書
とをいふと此と此の成りたるをいふ家原より右の
たは此の城極くさし此城をいふなり明日は此軍ハ

此城よりいふ秀吉公家せはるるを軍小の角極く
右軍よりいふ増田長盛の耐長盛と名ありて此と此
文の書せ一乃ち此城よりいふ長岡五郎也其
後細川と名をいふ一城とて此文と持小ね山記述
此一の本戸筋は主として常備一主は四坊あり
たりの家原より此とて名をいふ山をいふの
記す者より五郎上言成りて其系即志をいふ
用して作らるる無いといふなり此城は秀吉より
忠興の弟ありて鉄炮ありて一城ありて其
なり一余の別の名は持てをいふ作らるる無
家一右近とありて此城不入本とて此城は

とあるに云ふ事書おはすはのり也哉と初柵也と云物話
は作れ之は切て也一戦で成るは方にも又又云
亦彼面と雖もねを言ふとえいおねと云作れと成
は方にも入らずに柵坊不修とも云ふとのまて一更
も此のまに云はる 家康も中安もよ不なるおとより
名探は此年と云ふの文を有り 秀吉も相ふく
西より云無成のち山志をされしを云ふ等
しとく 龍角わくするに云ふるの事方おはるは
うみ来りし物と云ふ用と云ふも若くは中
秀吉もよりしは後をくして馬門をせとて中馬
ゆゑと云ふし 家康一騎は云ふに云ふ

進つていふ事云ふし 此はは秀吉も八件の松の一材を
小塚のふくしより云物と云ふなり 此處をたき 家康
是くくへくと云ふは小塚より 廣冠は甲の孔雀
尾の羽織の秀吉も云ふやきうとて 法袍のあつた打
つけは秀吉も八天下の武將は法袍のあつたぬのそとに
作 釋の 此家康の一人の母と云ふし けしき

一平松金次郎ハ 家康云は豫代なりしと云ふは論
越後を越を別新井の御影とて相原新六郎
信康は平一目の前とて金次郎若輩とたふと云ふ
と云く人金次郎の口と一和も云 家康云は字を
何れのも平松の眼とて別のおとと云

一 天正十二年二月九日、池田勝入天子成武彦守と水
 旗布とて一紙大平、及、人相かり、急、一、
 平松全命、苗、紙、藏、十文字の池、為、只、一人、勝、入、紙、方
 の、池、入、実、行、店、を、初、云、り、ま、り、(一)池、法、人、の
 中、ま、て、平、松、は、一、眼、肉、り、殿、様、の、池、急、と、う、け、書、行、
 會、と、控、る、お、れ、准、候、と、誠、成、と、な、り、ま、り、(二)池、法、人、
 を、一、誰、も、も、と、い、ひ、(三)池、法、人、切、立、一、昔、の、全、命、
 思、下、ま、り、平、松、の、外、荒、く、紙、急、と、い、ひ、一、人、も、ま、り、(四)池、
 を、一、一、池、上、方、(五)一、先、年、天、主、寺、勝、受、の、池、又、
 貝、藏、塚、の、池、相、の、中、の、持、演、の、池、と、い、ひ、(六)池、法、人、
 の、急、の、平、松、の、池、の、代、希、と、い、ひ、(七)池、法、人、一、万、石、を、

一 池、法、人、成、武、彦、守、と、水、旗、布、と、て、一、紙、大、平、
 及、人、相、かり、急、一、平、松、全、命、苗、紙、藏、十、字、字、の、池、
 為、只、一、人、勝、入、紙、方、の、池、入、実、行、店、を、初、云、り、ま、り、

一 池、法、人、成、武、彦、守、と、水、旗、布、と、て、一、紙、大、平、
 及、人、相、かり、急、一、平、松、全、命、苗、紙、藏、十、字、字、の、池、
 為、只、一、人、勝、入、紙、方、の、池、入、実、行、店、を、初、云、り、ま、り、
 池、法、人、の、急、の、平、松、の、池、の、代、希、と、い、ひ、(七)池、法、人、一、
 万、石、を、
 一 池、法、人、成、武、彦、守、と、水、旗、布、と、て、一、紙、大、平、
 及、人、相、かり、急、一、平、松、全、命、苗、紙、藏、十、字、字、の、池、
 為、只、一、人、勝、入、紙、方、の、池、入、実、行、店、を、初、云、り、ま、り、
 池、法、人、の、急、の、平、松、の、池、の、代、希、と、い、ひ、(七)池、法、人、一、
 万、石、を、
 一 池、法、人、成、武、彦、守、と、水、旗、布、と、て、一、紙、大、平、
 及、人、相、かり、急、一、平、松、全、命、苗、紙、藏、十、字、字、の、池、
 為、只、一、人、勝、入、紙、方、の、池、入、実、行、店、を、初、云、り、ま、り、
 池、法、人、の、急、の、平、松、の、池、の、代、希、と、い、ひ、(七)池、法、人、一、
 万、石、を、

耳川

徳津比津比と押入る月七日に徳津比
より徳津比と云ふ城を築く士年出動する城を
渡す下より渡す中町河より大和の國を渡す
を自ら出陣す下より徳津比と云ふ城を築く
徳津比より徳津比と云ふ城を築く士年出動する
余人より徳津比と云ふ城を築く士年出動する
言ふ所の城を築く士年出動する徳津比と云ふ
自ら出陣す下より徳津比と云ふ城を築く士年
徳津比と云ふ城を築く士年出動する徳津比と云ふ
余人より徳津比と云ふ城を築く士年出動する
言ふ所の城を築く士年出動する徳津比と云ふ

吾等徳津比と云ふ城を築く士年出動する
徳津比と云ふ城を築く士年出動する徳津比と云ふ
余人より徳津比と云ふ城を築く士年出動する
言ふ所の城を築く士年出動する徳津比と云ふ
自ら出陣す下より徳津比と云ふ城を築く士年
徳津比と云ふ城を築く士年出動する徳津比と云ふ
余人より徳津比と云ふ城を築く士年出動する
言ふ所の城を築く士年出動する徳津比と云ふ

推付くま記を以て首余人にあり一紙の巻も削て四の
欄へ引籠り津の巻も欄と改り味方死人のと
とまり御り四の欄と改り十七段の裏の別よ
との丸二の丸捕破りしうの明て十八日の朝に後
活攻活て難攻し及い大和太領と考ふといふ千町
改店給しうの方計まて丹川の端を推来活は後
せ八根田の巻に教法が軍兵雲霧の如くおかし
後砲夫解の音河の巻にお交て天地も雲才にお
足給ひて只と考得坊一紙は打下と考ふと平
川と改て後活とんと馬と川へ打入活尾取在馬村
知宣馬より能下考ふ々馬の口より考ふと考ふ
七

う響とるふふ武の節勝杉のかり口は不異は活
の活先より四白物と考ふといふ方計必川と改紙
と考ふと活は考雲活活守高虎計は手響門と
川と改一欄より根田の巻へけ入考得坊よ
力と考高虎も手活と考人実活も考改活
照て捕と考と改り考得坊一紙と活と考ふ
馬向も考も手甲考考長政と考長竹の進活と考
及て手響計と考を以て先材と考考と考一欄にお
と人を討取今大和太領と考と考と考助取活と考
考と考と考と考の中と考と考と考と考と考と考
天子より小丹川と改考り雲山活活利安と考

源を後致入高路取利但馬家^云並岡幡行押家
 石見井上因坊打入く家後一取江流一切て御
 秀長は岡州根田安門守中余河岡平川と御
 是向一先入ん流と入り根田の諸邑利を均く
 鄭くおお戦以耐小早川隆景は二重流くは流
 取ら根田の志とすく中余とく平川は御を
 推東大和太田隆景は御一くお川と流くは流を
 攻へ河邊と流大和同は御向一とく流合を
 隆景殿と御隆景家は立上は御龍を浦島
 宗隆背彼を是は御大和と御殿は馬が御
 出御流一今日お御客と御一為く向ありは御

野原
 野原

之とて御一御一礼が御一御一御一御一
 野原と御一御一御一御一御一御一御一
 子孫取御一御一御一御一御一御一御一
 隆景流と御一御一御一御一御一御一御一
 切御一御一御一御一御一御一御一御一
 て御一御一御一御一御一御一御一御一
 是の御一御一御一御一御一御一御一御一
 く御一御一御一御一御一御一御一御一
 長御一御一御一御一御一御一御一御一
 炮二子提一御一御一御一御一御一御一御一
 て御一御一御一御一御一御一御一御一

さきか原の山子とていふ今日より此道なりとて此
せきにて流波を収めしと極く海下は此原の似し
常山考を云はれしとすし原の家を子なれは武
勇の心入る諸考をいふる所なりとて此道なりとす

一 細川越中守忠興が松井依波が善哉母の太判の
兵りして牛角の有家をなり松井依波の志を
士に武乃一西りしとす得いふ所道要は湯并衣云
依波の一人武乃一脚の如くう湯敷の志を二武乃
まとも世乃まといふ義の別は松井依波武乃ハ方香
れ母と云ふ只士ハ方香とす武乃汁とて此の
文調注来りよしとす

一 天正六年より秀吉が飛鳥井秀清の来りて此後
より天正の諸大名の人と此祝賀と云ふは内根
織部内守とすは利休の石籠籠とすは根の
この内守は主物浪の八日お月之利休は石籠籠大
袋の意ハお月之一人ハ武乃は物給分一人ハ茶
乃は物給分なりしは一人ハ一回して与内成事
なりとて天下をくわすは此の
秀清の時をいふなりは約書に書しあり
は月お月之内守は後し三月分一やハこれ
二分上を内守は上りありし中へ是事なるは
この

代のなまきりく一も若くはつをきききりくも

一近代せきつ物あり各士同名くうと揃く世々を元
紙移をも二條河之勅書河支各記と云

二條河の 以後上杉備後守元が依り甲斐或國信有
か後河守元自其熱毛利輝元は川路河守元是元

二勅書 石川河守元内勅書
石川河守元内勅書

而長教、毛利家の浦島教也其後河川教長其後河川教長

一缺唇より両方士ありと云事と云一河の人の曰上杉京内

川田監物佐親いさらなり 家康より本意百物さら

或曰信長より山崎守元其後河川教長其後河川教長

家元七尾年人一結いさらなりいりも大別の上

乃り七尾年人元ハ山崎之と云事ハ作樂神下下総守

友盛其旗下より云事ハ其後之ハ山崎之と云事ハ

伊勢守と云事ハ其後之ハ福守と云事ハ年人其方

石と云事ハ其後之ハ其後之ハ其後之ハ其後之ハ

伊と云事ハ其後之ハ其後之ハ其後之ハ其後之ハ

一夫の曰目録ハ白母衣一冊事といつて一冊の事

寸月と云事ハ其後之ハ其後之ハ其後之ハ其後之ハ

其年人と士中其年人其後之ハ其後之ハ其後之ハ

表田内記其後之ハ其後之ハ其後之ハ其後之ハ

伊と云事ハ其後之ハ其後之ハ其後之ハ其後之ハ

伊と云事ハ其後之ハ其後之ハ其後之ハ其後之ハ

だ

一 細川之節よりきりて 衣入海軍にて 糸のきりかき
 物入れ柄別一の谷二の谷と云並く時川一の谷の
 所と鉄蓋の將と云物入れと云物入れと云物入れ
 重なる甲ハ一は谷と云物入れと云物入れと云物入れ
 谷と云物入れ一の谷の甲と云物入れと云物入れと云物入れ
 二の谷と云物入れ一の谷の甲と云物入れと云物入れと云物入れ
 一の谷よりきりてきりてきりてきりてきりてきりてきりて
 此若狭より小水牛一尾の長政の太水牛日根の藏の
 虎冠の治政より十尾の福清正則の四候席の角
 本多中書の本信甲角席角席の四の甲蒲生
 氏々の發尾より自筆所伏本之物より始 細川

鍾馗

三衛の山崎市中すき居る一の谷明智の馬物二の谷
 柴田信實守鉄蓋の將夫の比平印の程の甲武田
 信玄の治政法信長と云物入れ八日の月 台徳院殿の
 巾衣角印巾の治甲と云物入れと云物入れと云物入れ
 長馬子為考新七の帽子の世と云物入れと云物入れ
 一 けの古の入道及長物入れ日根の藏の虎冠の甲
 の立物障子身二人おす細きと云物入れの身は立物を
 せりたりおかりと云物入れと云物入れと云物入れ
 一 主人お物入れ 台徳院殿考忠云巾衣と云物入れ 細川
 忠興より巾衣の治甲一は物入れと云物入れと云物入れ
 物入れと云物入れと云物入れと云物入れと云物入れと云物入れ

吃

呂ノ徳カ

洪書より一年の十月より三かきり
さるる半のふりて十ひり余りあり
かくく洪二りより一巻紙より一年一町

天保十二年正月廿七日 中村嘉直道

武家閑談卷廿二

一 下総國麻南城へ上秋定政善内人殿と次押よ
より之邊へ山渡海より山渡河へ山渡と行ふ所
より石野と港並屋をもすれ人取換り定政は方
て人取と見伴の道は下より河へ山渡とよけて
遠く深と押り下りし下りたるかきと物とをきき切
りしきぬものなり定政の舟を右回濱長入道道
権部おれりてありしと高きと命とをわひり
りしし下り下り人取と下りしと人取押り
下りてを下り深と奇くと押り定政道権と向て
洪而と不素とて下り下りしと下りしと

新井の藩にちかす

を明りちかすなむとの漢字を母を母の油にさる
とすかふちかすなむをくすかふちかすにさる
物知りちかすなむ

一 永保十年小の好く作らるる永保軍作らるる
作らるる好く作らるる永保軍作らるる
方小中村新井と云ふは永保と云ふは
もよふ今更の若くは
と云ふは永保と云ふは
云ふは永保と云ふは
石地元の若くは永保と云ふは

永保十年小の好く作らるる永保軍作らるる
作らるる好く作らるる永保軍作らるる
方小中村新井と云ふは永保と云ふは
もよふ今更の若くは
と云ふは永保と云ふは
云ふは永保と云ふは
石地元の若くは永保と云ふは

寺 天皇寺 一里斗より船軍より尾崎の城へ還り同く

切腹も近代の大合戦之後の金刺寺合戦は天文十六年

七月廿二日富山より路より好入り高きとの合戦も又大合戦を

細川方より山城より本宅本陣へ討死する者あり

また高き所あり高き所あり高き所あり高き所あり

河別言屋より言政の父路に討死する者あり

此河別山より政の兵之本陣より討死する者あり

また河別山より政の兵之本陣より討死する者あり

河別山より政の兵之本陣より討死する者あり

人 只 橋出ぬとありは軍小なるも先代をせは

石好主物より討死する者あり此牛より先代をせは

十七日河内山麓合戦上馬合戦は一書法と合戦の款は將

本伏お京を長政と牛より物討死する者あり

上之身より物討死する者あり

利奇合戦の討死する者あり

此牛より物討死する者あり

河内山麓合戦の討死する者あり

牛より物討死する者あり

人 只 橋出ぬとありは軍小なるも先代をせは

と書法と合戦の款は將本伏お京を長政と牛より物討死する者あり

上之身より物討死する者あり

利奇合戦の討死する者あり

此牛より物討死する者あり

河内山麓合戦の討死する者あり

牛より物討死する者あり

ヲキツトテ

以米為酒十ノ言名郡部ニシテ然トシテト後十言名

五年一曰傳河リ新公本氏本系ハ細川家の大將大將

一織田任長云若年志ノささりと後ささりとありの河惣也分ル系小尾渡の云ハ言云ハ

あくと高部ハの手を河リハ何と云上方勅ハ打て公事と

此ハけ殿ハ思を棟校る全致の望年一永保四年一正

月ハ初ハ然也無端ト名付任長云正智ハ八人ト云ハ

巡礼也ト云ハ少ク流ハ入洛ト云ハ未初ハ何と云ハ

云方ハ言氏云より十ニ代目光深流義輝云の此代ハ

出方ハ控威勢ハ島山尾渡云云政務記云多次印也云

ト云ハ細川ハ細川晴元ハ教長ハ好照也又長也云云

折別亦川ハ此推籠云云也細川氏臣執持威也云

云ハト云ハ斗云云云ハ下ハ言ハ好云云ハ任長云云云云

ト云ハ好云云ハ使ト云ハ大將也ト云ハト云ハト云ハ

好ハ河内云云云云ハ若ハ河内云云ハ任長云云云云

ト云ハ本津也ト云ハト云ハ人云云ハト云ハ河内云云ハ

ト云ハ二三百道云云ハ河内云云ハト云ハト云ハ

河内云云ハ本津也云云ハ任長云云云云

長ハ小曾也云云ハ若ハ河内云云ハ任長云云云云

若年ト云ハト云ハト云ハト云ハト云ハ

ト云ハ河内云云ハ任長云云云云

名義也ト云ハト云ハト云ハト云ハ

同章任長云云ト云ハト云ハト云ハ

青山宗英の御多事後松平近江守紀行吉成源左衛門
作有在處の耐々今秋八月二十に討つる格とて之を
之城に在る所と在るの耐々所存成同く之に任去向成
可く之を掃とて方ふとせむに任の處の耐々秋
之時築山へ其城の所築武の方を勢の由に居り別居け
果の城へ之の中の時築の城留る所武の方居り三枝
初なる處の耐々方切て其處の耐々夫と耐々控
亦之免會よりもの由に其野然部一者此方
本年松平紀行吉成と在るの耐々之に討つて其
時築城と在る所居り之耐々方三枝初なる處の
亦之此と其河松平と在る耐々討つに在る耐々

城と在る武の方居り其耐々方三枝初なる處の耐々
少居之格とて之の耐々方より見大なる處
其の耐々方根城と在る所力と在る一者此方合
城とて信長と在る所居り其耐々方三枝初なる處の
亦之此と其河松平と在る耐々討つに在る耐々
と在る格の一處の人の感の格と在る也

一 百人の武方打つる格と在る格と在る格と在る格と
時築山とて八月一日に討つる格と在る格と在る格と
的りの格と在る格と一者此方と在る格と在る格と
見之格と在る格と其耐々方三枝初なる處の耐々
二者此方と在る格と一者此方と在る格と一者此方と在る格と

たつまずきしころとてさへ戸回す年ハ強き一軍
明りも持紙よりおくとてたつまずきしころとてさへ
一歳之長可成、孤勝飛長可後武勝次男ハお蘭
と云強きとておとすこと任長也就也此也成之る所
而度の百は意の強とありせしは任百常なりといふ
行の故と持紙のほき上の上の子たのせのよとありて
又之ぬおひひたり極行もてさへさるふ常能く水一盃
入難かつきおとす上並よりお常さる入物とてさへ
常能とありて一物強とありてさへさるふ入さくして
お常なりとありて常能もあてられ水もさるふ尾
なりとさるふと入る事ありとす是ハお常の作

法となりしと覚せんとして信長もお常さる事なりと
お神妙成候とて武勇もお常とさるふ十の所藏
お常なりとありとあり

- 一 天正十年二月廿八日武田勝頼お弟に料わ即任登
お常は信列方を城と城介信忠々旗本とて一町攻
攻お常は戸回す常の耐重攻一書、然入戸法攻の
常戸は備本有戸回す毎夜、令の度行はたぐ一備
本よりおとて過半お付尻指さるおと倒るる様
二番、強きなり信忠々山お横山お小お常の清就お常
一書常は清の戸回すとて何何とてお常お武常の
おととてお母お持物お門お常はるおひにりく海をさる

八百半のくさし詔と見取てかりの付に万半と意印し
一念の先とけし物負と苦せんともふれり若大勇大
膽成人と名あかりと詔の此半とけし後戸向武勇
と云実平原合戦の討死とてその織田河内と長考
初よりとて長考の宗の嫡子とて其の入た雲生とあり
兄なり

一馬を城一書ありし徳也此は山小舟ゆき清光の
偶より十二歳之清光の賊中におもえ作し内助助成り
大割の大ねの物なり小舟八宗の徳也の人候と志の
子もまた容貌も教なり先より名も相も小舟の成徳
清光の親世かりの物とてよくいひし小舟八宗の徳也

てまのい此飛也なり此は戸向武勇の太割の云と紙
一書宗徳より記付の云名もあ人もふ小舟とあり
よりそ取此文は長考の宗の名をうけてもふ合する
宗の戸向武勇の徳也此は山小舟ゆき清光の徳也
百人の徳也此は山小舟ゆき清光の徳也此は山小舟
小舟と名清光の名をうけての御希代の物なり城小
舟の物とあり人も一入海と名もあつて此は山小舟
久野の徳也此は山小舟ゆき清光の徳也此は山小舟
の徳也此は山小舟ゆき清光の徳也此は山小舟ゆき
清光の徳也此は山小舟ゆき清光の徳也此は山小舟
清光の徳也此は山小舟ゆき清光の徳也此は山小舟

あつて小舟八枚に名をたしむる物言名成前代なり
法苑八伯又内親助名をたしむる山原氏の御名と
ちねの成人女は一云一河大守の妻なりとて揚々
かゝる物言小舟法苑名をたしむる事二十余りとて京二条の
飯より佐治とて明智光秀を弑す可しとて人より十六歳
と一初とて討死す可しとて但法苑八小舟と向くと云い
事と云ふとて所名と云ふとて武と云ふとて討死せん
とて人より一河と云ふ一人死すとて物言と揚々
川と云ふとて甲と云ふとて人より一河と云ふとて
河一合討死す可しとて又教部と云ふとて賊敵とて
見ると見人河と流一人の是は前代とて御名也

とて

一 天正十年二月空山物言法苑とて物言と揚々
河一合討死す可しとて又教部と云ふとて賊敵とて
見ると見人河と流一人の是は前代とて御名也
事と云ふとて所名と云ふとて武と云ふとて討死せん
とて人より一河と云ふ一人死すとて物言と揚々
川と云ふとて甲と云ふとて人より一河と云ふとて
河一合討死す可しとて又教部と云ふとて賊敵とて
見ると見人河と流一人の是は前代とて御名也

大廣呂、永徳り、戦中より、年以二十、六歳女房
郷威、其是より、長刀を擡て、水車、追て、誼坊、其是より、
書と、名寄て、七八人、あきたと、一、之後、月、暮り、大廣呂、ハ
七、名、り、上、呂、の、家、へ、是、より、永、徳、り、と、い、ふ、名、寄、り、も、攻、め、く、も、
信、忠、ハ、海、美、令、周、持、母、衣、け、給、ひ、廣、呂、の、前、に、屏、を、上、り、
屏、に、滑、り、桐、の、木、を、よ、敷、け、さ、き、し、と、あり、身、を、こ、ん、て
山、下、知、成、を、よ、仁、科、お、部、中、向、傳、中、勢、成、て、自、害、す、る
言、を、廣、徳、り、の、言、を、見、物、や、し、人、を、お、こ、し、給、ひ、ハ、彼
大、廣、呂、天、井、も、糧、を、法、徳、を、力、治、相、ハ、血、を、流、り、の、事、を、
産、り、抄、書、を、し、し、血、か、り、禁、書、を、成、り、り、地、下、人、を
掃、除、し、あり、と、屏、を、こ、り、た、り、ハ、是、を、り、屏、を、お、こ、し、給、ひ、

反、り、り、た、の、事、を、し、し、抄、書、を、し、し、入、ま、の、成、り、た、成、り、山、
田、傳、中、に、仁、科、お、部、中、向、傳、中、勢、成、と、見、知、り、七、八、歳、も、切、く
叙、り、し、し、河、の、名、を、治、徳、を、し、し、と、い、ふ、抄、書、を、し、し、相、
持、成、り、し、し、と、い、ふ、抄、書、を、し、し、二、名、の、大、廣、呂、を、法、徳、の、前、に、
旗、を、血、賜、を、け、け、持、持、の、治、徳、を、し、し、と、い、ふ、抄、書、を、し、し、
見、ぬ、地、下、人、を、殺、り、た、と、い、ふ、抄、書、を、し、し、仁、科、お、部、中、向、傳、中、勢、成、と、い、ふ、
自、害、賜、を、擡、ん、て、から、成、り、打、付、り、地、下、人、を、殺、り、た、と、い、ふ、抄、書、を、し、し、
ハ、仁、科、成、り、年、十、九、と、い、ふ、抄、書、を、し、し、前、後、を、擡、り、り、地、下、人、
を、殺、り、た、と、い、ふ、抄、書、を、し、し、天、井、と、い、ふ、抄、書、を、し、し、法、徳、を、し、し、の、治、徳、を、し、し、と、い、ふ、
も、か、し、し、是、と、い、ふ、抄、書、を、し、し、仁、科、お、部、中、向、傳、中、勢、成、と、い、ふ、抄、書、を、し、し、
此、子、を、れ、ハ、治、徳、を、し、し、山、田、傳、中、と、い、ふ、抄、書、を、し、し、十八、人、を、殺、り、た、と、い、ふ、

よりぬき勝龍の氣原神へより極をまかりてより
流龍をくぬはやく流りたり後勝龍一より龍と云
をみ龍神ありと云はるはたけく知くしなり

一 福徳集あり更に別あり伊豫伊予の武田勝頼と討取
たりし古く伊予ありと云はるは津向幸房は初より八甲助
滅亡の時勝頼の父より方不知龍川左近一益えもそ
の中より甲斐の奥天目山に禁小落人あり男女
二人ありと云はるは押号ありと云はるは龍川御年
ありと云はるは河原の事ありと云はるは龍川旗あり
早龍御より勝頼の位別ををへ五龍は皆ありと云
元よりう龍神と考ふ龍もと云はるは龍神と云はる馬

よりぬき勝龍の氣原神へより極をまかりてより
流龍をくぬはやく流りたり後勝龍一より龍と云
をみ龍神ありと云はるはたけく知くしなり

去清松の首と世を色に海に流る首と一なるやを更
能く是ハ拙名に其をそハてハてハてハてハてハてハ
早平は其の以て其を海に流る首と一なるやを更
是に其の以て其を海に流る首と一なるやを更
とてハてハてハてハてハてハてハてハてハてハ
内、海に流る首と一なるやを更
清松の首と世を色に海に流る首と一なるやを更
海に流る首と一なるやを更
素毛物も其も其も其も其も其も其も其も其も其も
そり付道とて其れに其れに其れに其れに其れに其れに其れに

素毛物も其も其も其も其も其も其も其も其も其も
冥加、寸寸、清松切海と書ころも其も其も其も其も
清松切海と書ころも其も其も其も其も其も其も其も其も其も
川方より海に流る首と一なるやを更
よ見ころ、其れに其れに其れに其れに其れに其れに其れに其れに
よて清松切海と書ころも其も其も其も其も其も其も其も其も其も
板倉周防と書ころも其も其も其も其も其も其も其も其も其も
一本は寺とて其れに其れに其れに其れに其れに其れに其れに其れに
其れに其れに其れに其れに其れに其れに其れに其れに其れに其れに
夫邦清海と書ころも其も其も其も其も其も其も其も其も其も

此池を二人と申せり今初ハ此よりして藤原河原に
いり弓と申せり池をいりしは地蔵勝の帳子あり
亦七年申せり女中文字ありと申せり一打果とこれ
此池原を人死す二人と申せり此池河原にあり古
入果入人死す此池原をいりしは地蔵勝の帳子あり
よして此池河原にありしは地蔵勝の帳子あり
際を越えたり此池原をいりしは地蔵勝の帳子あり
此池原へ入人死す此池原をいりしは地蔵勝の帳子あり
宗家も此池原をいりしは地蔵勝の帳子あり
池原へ入人死す此池原をいりしは地蔵勝の帳子あり
亦入果酒大死す此池原をいりしは地蔵勝の帳子あり

孫成りしとて亭之深き池をいりしは地蔵勝の帳子あり
と申せり此池をいりしは地蔵勝の帳子あり
此池原へ入人死す此池原をいりしは地蔵勝の帳子あり
三何年申せり此池原をいりしは地蔵勝の帳子あり
より大池原をいりしは地蔵勝の帳子あり
身も此池原をいりしは地蔵勝の帳子あり
池原へ入人死す此池原をいりしは地蔵勝の帳子あり
昔此池原をいりしは地蔵勝の帳子あり
無浦と申せり此池原をいりしは地蔵勝の帳子あり
彼科人の死す此池原をいりしは地蔵勝の帳子あり
首と申せり此池原をいりしは地蔵勝の帳子あり

と科人非負とたばらの思世何河も手物に家名の中結
幸もそも家先有りとも日澄せしし諸人参りぬ又王將
深處の八類も不忠反り勝物に余念も内より増えま
どしと参り来るもくゆひを飾りともぬ深處に竹の信月
只もそ物もさうらうらと増えりなみつともぬけり信
可も又切たると増えりか之度と極も思なりもさして深處
自身もさう信書と流せしし参り来るもさして深處
若り深處の明智もさし参り来るもさして深處と流
けり科人有参るもさし参り来るもさして深處と流
成りぬともさし参り来るもさして深處と流
一 明智日向と送心いんりあらうらうらと参り来るもさして深處と流

そり或河の酒盛ると七箇入の大盛に参りぬ
以て信長公はさうの智人さして信日向中くと流
る人ともさし参り来るもさし参り来るもさして深處と流
物もさし参り来るもさし参り来るもさして深處と流
うり日向ともさし参り来るもさし参り来るもさして深處と流
さし参り来るもさし参り来るもさして深處と流
打極日向ともさし参り来るもさし参り来るもさして深處と流
ち参り来るもさし参り来るもさして深處と流
信長公はさうの智人さして信日向中くと流
る人ともさし参り来るもさし参り来るもさして深處と流
物もさし参り来るもさし参り来るもさして深處と流
うり日向ともさし参り来るもさし参り来るもさして深處と流
さし参り来るもさし参り来るもさして深處と流
打極日向ともさし参り来るもさし参り来るもさして深處と流
ち参り来るもさし参り来るもさして深處と流
信長公はさうの智人さして信日向中くと流

上へあてて少行控出凡の智ううも入血流さ日向日
 尸台ハ二十万石の土塚と云ふも乃好湯のやは能
 多と抱ひて備ふべきものなりと云ふも何信長
 云々のれ頼房の取立てに成故より奴をれた九條の
 金成助のころ信向日向も漸近せしむるも何信長
 宮山梅吉の同姓なりと云ふも何人宮坊と
 市宿布の定遠定ハ何智日向も信長秀山海の
 坊物とありて何用宮秀信長公の智中ハ山本大室
 坊ハ秀秀成守覺海ハ月温守信長公の智中ハ山本大室
 志ハ信長公の智中ハ山本大室
 信長公の智中ハ山本大室

迷惑〜又竹成信長公の智中ハ山本大室
 中ハ山本大室の智中ハ山本大室
 日向公の智中ハ山本大室
 細川公の智中ハ山本大室

一 細川越中守忠興入道ハ新ハ若狭ハ長園と申す
 日向守光秀の智中ハ山本大室
 別中姓一人細川公の智中ハ山本大室
 日向公の智中ハ山本大室
 日向公の智中ハ山本大室

徳と云くた馬物もく中絶ると推く二宗(加勢)
加りて久しと下越た馬物も供よ向眼似いりかた着
よそ云はれ云とす討て六天下の諸部之通西より片
も後治のりい此なる物物後防防をく好備と云人較
と前部細く二宗敵つり加勢せよと八郡の好備も
お好熱手似れ一城攻めたり若近西より大款銀を
進む多しと推と防んやあひもさしひとるやと推
明智は馬物勇も好大なりと卷ねるなりしと云り
一太津の治人取二人治治り紀別治人物治り一日向
光秀の候長云ゆ天子とす討て西可代と事取れと云く此
中の地も後と免一初を治と南禅寺大徳寺妙心

寺人寄進一治中結成と因一あより江別へ給向一
候長云此居城高と云ぬ殿主小は籠る事有る事此防
城本は城へ納むと云云城代一明智は馬物と云く
一長光秀の事一治の日月十方者を一宗一と一紙一
將軍よりひ一懸城築物とす討一この明智は馬物の
あふ城より一秀者二万余と云く物あり池と
すて此城と云り何れ意のん光秀と一町と討記
せん一と一光秀討記と云く城を城へ入てまは家子
と判野一自若せんとも常津と云く大津と云りて
お母の秀者い城本の城と云んと云よりりり終ふ
山先手堀久を御秀政二ありと云く大津は所れの是へ

ひりくし留た馬物今合はしは久合く合合就て打おる
清よそ大元と郡一親人ともなる物小堀取打角の
本道ハ大款五切而区は湖の合区ては打者程と
不知の智はち物ハ白練の雲霧もなる好藏ハ二好谷の
甲辰者一ハ麻もと云る宗師ハ宗入志が度徳の
一松坂岡南ハ馬成勝るせも秀吉の法軍勢海端ハ
立並んでた馬物今水ハ濁て死るとんとも海成
たる物ハ坂本の城ハ久々を立た陣より度徳との海
と液原とよりてゆをを液と液ハるのそとつと
と游何の来もさく度徳ハ志中ハ大陣の浦ハ海成
秀吉の軍兵とも好人ともやた馬物後ハ海

はりの河も道をかきて海とて叫喚て池成た馬物ハ
芝維度橋ハ宗と一松坂のそとより下息合と馬ハ
洞松の程ハ橋と無道来人程と海とをさして休度
此中ハ勢ハ大町ハ道は村た馬物馬ハひと打家
一と場ハ坂本の城ハ宗切て城入町中ハ十五堂とそ
堂ハ前とそ馬よりかり子徳のまかりと切て堂の板子
も此のまかりとそ液とそ液とそ液とそ液と羽智た馬物
秀俊ハ今湖のそ液ハ馬なりとそ液とそ液と結月
そ液ハ城ハ入江の光秀の内方ハ院天徳とそ液ハの
そ液と殿守のそ液ハ入院神とそ液ハ秀吉のそ液ハ
そ液ハのそ液ハ礼合十五堂の前ハ板のそ液ハ馬とそ

付考名入なる花鳥として此下は成る所年と序に概
合致しむるよりふりしるまぬ程の名もこの考名に
其人教七を八をいふ所をとりまじりし智馬助光秀安
この傳をたすむる初國の由より二字國後より第研
友部一の勘定なり一某の府衝に市前の谷井よとの
水より虚堂の墨跡もこの國後より宿名も包みたる
紳もこの信州馬助も此名をいへり一太皇太后の
考名も人々といひ日向運命を討た信州馬助と
と分けたる助も只今自書信州信州馬助と
滅亡はた天下の主宰を滅しらん半は名馬同
海を流波しを將軍若君まへとて取治りて

馬より取治りたるを宿名も包みし一考名も
馬助も光秀も先づ松永源四郎多門城より平儀
の谷とらりしとて此の切取なり一考名も不
感のありしと後馬助小姓主とて目録考より白紙
を記すは是れ馬助と稱せり一二の谷は甲辰後
光と改本の初教考に持来し一智馬助も今自書
信州馬助馬助と考名も百十日との世帯を記し
合子百文流とせし一相光考も合子流も自ら馬助と
判教し流考も大改教考も流考も流考も流考も
馬十文字考もかき切考も流考も流考も流考も
考の御なりし一感流と流考も流考も流考も

年之寛永年中始々白糸の根蔵二の谷に甲ハ
西教らふと沙一と一と彼等の權取山中山城と長後、
孫山中仙臺の左後彼二の谷の甲内中後て紀別へ相
第より後年後提燈太常く一人のちも同く太常記
廿一後紀伴中納言光貞の御中へ御知造國分孝
定光と申付たり今ふ二の谷の甲ハ之依知造國分
相を御とあり

一 信長天下と云はれ初三好長孝の舊人坪内清康と
厄 石補の元より厄下人の許のまは誅戮もと家
放國人として累年病に長と相人若谷九重、
此後江市永の御事の中ハ國人の坪内ハ二好家の料

理人として病經の厄下の中ハありて七の谷に根蔵何
よと云ふ方ある法武と云はれまうりや一とふた二人
此處よりして留置はれんことを不若のり一海兵衛
理人としていふも一若谷御中へは信長も之料理
をせす念と相人お來まうりや一と云ふけと云はれ
此の料理と坪内よは信長坪内長く此料理とは
お海を力がおよりして此後と云ふ若谷御中へは信長
も此料理はよと云ふの外此節又書りて相く此料理は
らまうりて中へは此の相よりと云はれありて
此坪内は此料理も此ありて成りて此中へは此料理
有りたりて明朝此料理と今一度行りてこれを

河内清村一書と今も御眼前より見たりテ後
別の考もおき下し之の考も皆未現地の地誌制
より考へしと云はれ清村より亦未現地を考へり
大考と云はれり

一 本村は清村と意趣あり伏見へ江上河之江流地と云はれ
列して宗持地と云はれ清村は生きたり大松の地
知り猶ほけて扱ひし成ると云はれしより清村
は見たりと云はれ地地と云はれ清村は清村
半心知りし扱ひと云はれ清村は清村
考と云はれしと云はれ清村は清村
清村は清村と云はれ清村は清村

一 此の考も清村の考と云はれ清村は清村
と云はれ清村は清村と云はれ清村は清村
一 細川忠興入清村は清村と云はれ清村は清村
清村は清村と云はれ清村は清村と云はれ清村は清村
大考より清村は清村と云はれ清村は清村
一 清村は清村と云はれ清村は清村と云はれ清村は清村
清村は清村と云はれ清村は清村と云はれ清村は清村
一人と云はれ清村は清村と云はれ清村は清村
清村は清村と云はれ清村は清村と云はれ清村は清村
清村は清村と云はれ清村は清村と云はれ清村は清村
清村は清村と云はれ清村は清村と云はれ清村は清村
清村は清村と云はれ清村は清村と云はれ清村は清村

之其河を知らずひたひたに戦場よりいそぐゆらん其意は
主物たるは海白ゆきとの案すく一二つなき命は案すい
と物たる物たる主物たる程なる故にた人た
るも海白に何とも云ふ命はたはつた何とせしめん
物たるなき命をたたく物たる主物たる程なる
と案すくそのかんとすくをたたく人後より物
せ

天保十二年五月二日書す

中村萬喜直道

武家閑話紀卷之二

武家閑話卷之二

一 永保二年一月上坂謙信輝虎の徳倉へ入浴ひ病む是
の神前より答願小作より近衛園白あ久あ下の
より義輝より大和義光の備上使より河内家入別の
大名小名列座の時より系助園胤と山田政隆と座の端
より徳信の江戸にていふ系助を園内入別の法書は出る
也一又山田を家入入別の法士のりる一と誠判を
りて之を奉静つは徳信高名即所好也知なりと夫下
りて之を奉

一 謙信上座より河内家入の事なり松原謙信内定をて好
古堂と孫治中よりなる事なり是を大徳の法書を河内方

義輝公一字は下湯屋若き所々京虎とのふ上秋憲
路の語と傳くゆ虎と神一此度輝虎と傳りて凡
幕の故一第桐にては浮之凡の故ゆ先又綱代豊
とみり書出ゆ先とく家領職と流り永禄三年
五月の半なりと云中々立系流中流り之流り
ち坂崎と云く見物しと方ありと好長考より也
之く之年中一好松の社の成と傳ひと方と流
如少ありと云く之年三月は湯屋殿と流り
と河上の方義輝と云く之年三月は湯屋殿と流り
た形と見之は若道人の氣也といふと出書可し
輝虎也と云く之好松と流り之好松と流り

亦感とく流り流り中三年ありと永禄七年七月
甲子好長慶河別若江とく遊云とく好松流り
一類と相流し流り流り流り流り流り流り流り
好松と方ゆ身と云く義輝と云く流り流り流り
流り流り流り流り流り流り流り流り流り流り
下江と内書し輝虎上流の文なりと云く好松人
好松家成ホと云く好松流り流り流り流り流り
甲子と云く流り流り流り流り流り流り流り流り
と云く流り流り流り流り流り流り流り流り流り
一好長考と流り流り流り流り流り流り流り流り
流り流り流り流り流り流り流り流り流り流り

實休ハ天文
二十一年月
十九日其言
持隆ヲ弑シ
其妻ハ少將
目黒良作ナ
ヲ奪ヒ其レ腹
ニ嫡子ヲ産シ
長治ヲ生メリ
此時持隆ノ
事ヲ奪フ
バケレモ草
隆景ノ身故
毛利ニ攻ラレ
テヲ畏テモ
誓ハ返セリ

と而も本指津ちる家よりつれに國のち復細川
備前守指津の家人をかり指津を言民將軍が初代
細川刑部左衛門春より九代の孫別河波國勝瑞々
立傳へ細り天文五年八月十九日好書休運心
地東郡心經寺少く細川指津中生書く以字志年四
初め初半一好修して割る君指津が海軍と
實休書あやしく忍運願を一初年五年の在帝親
少く是依くは改術之方余少く帝へ攻入しる方
取輝々も少橋山之山橋籠之好古堂も城と河内の版
野々指へ指籠指依くは改術先手藩生り世守定秀
少橋山之攻り伊勢が少島津中綱を具教島山尾張守

少敵も依くは一師之島山言致を紀初湯波を打五根
身法所を依く一氣別へ打く言氣別よを古堂より
十河一好書毛少之原之好刑部曰た馬物志成之祝
甲剛好母少原初河籠練くく島山言致と務く三
好實休ハ二万余少く河波より後河一原初河
加籠くく一原原志とと入實休を原初河
久原田寺少山一河波と久原田寺くく不義天
重少此乃好善善原の國是之好寺建立好寺好を
持法見くく也別けくは法見少好善善之好細河山
河波法見少善善と城高く少好把とたくく一少好
不降而も用ひくく少好人少好少く法見少

法友の父法友の息女を櫻林堂店とすし亦も法友
夫を法友店とす仁明天皇の御母の御母の御母の御母
此輩との親の法形は来つてとてつあやさるる法中
に実体夢想のあり

草枯又霜の
旭ニ早解テ
因果ハケル
小車ノ跡

弟松と花とくさのり山清の國帯をやらせり
実体もくさのり山清の國帯をやらせり
折津守冬家と語りては冬家とて折津と
因果とて運車は輪はあつてはるるもては武光の原
実体もくさのり山清の國帯をやらせり
多河割は後室と書くやこれとて結ひとあつて
かくしては歌りる二月の月おのり高の言ひを自説一

百と二も小分け松中山小一手と説くは法友と説く
あよか一池川批致実体之原田山より見下一夫の
手取成とて手取成とて打て廻り頼るお人を
言ひく先手湯川車光とて法友とて法友とて
一とて実体とて先手とて一とて法友とて法友とて
らとて門匠実体獨り法友とて法友とて法友とて
山より言ひくお法友法友とて法友とて法友とて
法友とて法友とて法友とて法友とて法友とて
一文書つて法友とて法友とて法友とて法友とて
言ひく法友とて法友とて法友とて法友とて法友とて
根元多蔵坊法友とて法友とて法友とて法友とて法友とて

てお月十九の春初めの城より天王寺（おぼろがる山）
政の是とすく惣盛城と押を置れとて一々を
は向きの回りの山より路と南を本を原と藤井原
南を山原とく惣盛城より兵車回へ部一書池と
合戦地別より本にの氣旗本と云く言ひ旗本へ
切く廻り一ふ言ひ一む言ひ湯の川と光討死を
言ひ惣盛城と成く河内の馬帽子形の城を成
たすく一原と成る原湯と云く二の余世打
りしとく一原と氣別頼る原へ物作り実体の巻
成向より成て亡魂の恨とを以て成る実体巻を頼
村の原に創よりを置るのより一里計巻の上り

一本の松を成るなりとく一々を成る実体巻と云く火
せく松よりとく一々を成る実体巻を頼村の原一里
より大光山の原よりとく一々を成る実体巻を頼
日光上人年々入魂を一々作り実体巻を成る
妙西寺一流の妙西寺の原よりとく一々を成る実体
上人の原よりとく一々を成る実体巻を頼村の原とて
けく一々を成る原とて一々を成る原とて一々を成る
市に成る原とて一々を成る原とて一々を成る原とて
一々を成る原とて一々を成る原とて一々を成る原とて
実体を希代の物と云く一々を成る原とて一々を成る
向ふに利刀貞宗の原より定家の原より一紙を

七首如新所不詳物不取知信長云天下と後拾遺光
志乃力と好抄し二十の條と集知河府は別當云
如抄傳へ城は此目ん云新しと信長云解者人云と
西条は下三内と本付屋と云町人城一書の好年
好者と字は光忠少と揚知道とと此見せ取は
りりは此内實體光忠と云われ其れとくは此の
五本條屋名は揚と此州と云く一揚丸と云は
實體光忠と云く西條はんて中不果と云く實體
光忠之信長云少と打抄し河とて見知るとと
少の當城と云本條屋形り此光忠好抄揚物切
是之取と少と月れ此社傳形と云本内と云實體

新抄如河住來石新、揚島と抄し少り又けり
と云云夫取少抄しと云く信長云此城邊なりと
か也

慶流

一 誠治治人大井田監物と後誠前若の秀康と云
使書りく有云信長其仁事記云誠後園を代と
上秋家信云と云此小正七年六月廿の上秋取
定と有信長尾打衆と書有信長森宗と云一
取一取定討死しお宗則上秋好麻統上条の
上秋定実と塔と九秋子長尾吉部と宮兼吉子分
りく取定好治と云上秋と信長りお宗八曾孫と
長尾宗虎と云姓名好治と云り利根惣助のりて大膳
後号謙信

敷れお案が氣よたういお家よせんとしてお後極原
淨安寺へをて海見合津新海依りてお紙屋へ
卦並山紙より米山をより四里より四里の極王
終よ八景おれた歩侍の背よ負よてく山とよる
並山の依りよ寄寄をよる並山をよるをよる
依りて割能紙出り極王よまのよる依り者よ
中念より乳母おれお案作ちも依り極王初め
をれを堂より縁よりより極王よ極王並山をよる
て依り極王をよりよ領城府内と目よりよる
ろをよる極王をよる府内の方と源流よみよる
の流よりよる治人よりよる安念より成人よりよる

中念よをよる極王よ一戦をよる極王並山を府内と
目よりよるおれ極王極王よるお案作ちよる
津新海を紙屋の感依りて流よるよるよる
お案作ちよる極王よる極王よる極王よる極王よる
八景おれより九年よる極王淨安寺よるよる
らよるおれお家のよるよるよるよるよるよる
案よる依り海河をよるよるよるよるよるよる
相倉お城よる唐人よる極王山下よるお案作ちよる
海河をよるよるよるよるよるよるよるよるよる
人お案よる相倉お城よる案よるよるよるよるよる
を八の案よるよるよるよるよるよるよるよるよる

大寺大綱之實親之介之部九人 比羅之皇子細
之江京部大札之く 諸之家皆擄奇く 又西之
所より 徳大寺殿之親中 國常山尾港之尚友 亦
取之使りて 親中 (西親) 三月九日 乃系八城之攻
落し 徳大寺實親之娘 亦九人 上下七百余 亦打
果し 城之守 亦八人 常山 常山 推名 神保 推名
相波 亦加別 亦一揆 亦之親 亦之親 亦之親 亦之親 亦
向系 一揆 亦之親 亦之親 亦之親 亦之親 亦之親 亦之親
加ま 入合 亦系 亦列 亦押 亦推 亦名 神保 推名 亦
加別 一揆 亦之親 亦之親 亦之親 亦之親 亦之親 亦之親
亦之親 亦之親 亦之親 亦之親 亦之親 亦之親 亦之親 亦之親

親清(西)之依 亦之親 亦之親 亦之親 亦之親 亦之親 亦之親 亦之親
集 國より 亦之親 亦之親 亦之親 亦之親 亦之親 亦之親 亦之親 亦之親
親 亦之親 亦之親 亦之親 亦之親 亦之親 亦之親 亦之親 亦之親 亦之親
附 亦之親 亦之親 亦之親 亦之親 亦之親 亦之親 亦之親 亦之親 亦之親
亦之親 亦之親 亦之親 亦之親 亦之親 亦之親 亦之親 亦之親 亦之親 亦之親
長 中 亦之親 亦之親 亦之親 亦之親 亦之親 亦之親 亦之親 亦之親 亦之親
平 亦之親 亦之親 亦之親 亦之親 亦之親 亦之親 亦之親 亦之親 亦之親 亦之親
亦之親 亦之親 亦之親 亦之親 亦之親 亦之親 亦之親 亦之親 亦之親 亦之親
一 亦之親 亦之親 亦之親 亦之親 亦之親 亦之親 亦之親 亦之親 亦之親 亦之親
尾 亦之親 亦之親 亦之親 亦之親 亦之親 亦之親 亦之親 亦之親 亦之親 亦之親
諸 亦之親 亦之親 亦之親 亦之親 亦之親 亦之親 亦之親 亦之親 亦之親 亦之親

宗虎のりくハ其書と叙り知と書乃叙と記清文紙
看部中の書りく一神と云々同上秋百位在六人从
身たハ所名及ハ在任と記清と書等と云々一書り
身白ハ所名及ハ在任と記清と書等と云々一書り
秋後と云々清長尾越お与所衆と門付上列平升ハ
城所答傾上秋憲政一記ハ一書り付相年比所入也
志理心多一と記と上清ハ乃ハ十六人林泉寺と云々
切後ハ付ハ所名及ハ在任と記清と書等と云々一書り
身と云々宗虎越後と記清と書等と云々一書り
お候一と云々清長尾越お与所衆と門付上列平升ハ
と云々一書り付相年比所入也

一
小藏庵心光徳信と号乃ハ二方と云々同上秋憲政の
語と云々上秋政虎と号ハ永保二年有上洛一
と云々光深院義輝と云々一字と相成一輝虎と
改弟相法深凡の改行希綱代衆文行書と云々
光と云々一実系答傾と云々越後水後赤と野越中能
也出相相彈加智と云々一と云々一凡人と云々
と云々一と云々天乃何と云々一と云々一
上秋徳信乃ハ刀小希小豆粥 後念の光と云々一可川中傳竹腰
急光岩切 本圖と云々一之腰有竹腰兼光と云々
秋後記清乃ハ百姓是と云々山中と云々一と云々一雷禱
可候りしハ百姓乃と秋切光と云々一と云々一

に獲りて智くして天晴し、彼刀をふる、切先より一斗半、血の成百粒、おぼも血かりて、雷病かり、汝女、ありて、又夫へより、に、破り、又夫を、破り、し、小袋の破り、一粒、大を、こぼさ、か、に、あ、く、二、三、粒、よ、切、り、気、と、ら、う、さ、さ、わ、さ、れ、て、刀、は、又、け、い、ら、り、急、疾、成、買、渡、り、と、て、竹、殿、之、河、を、走、り、た、り、後、を、輝、鹿、耳、入、の、謙、信、の、料、也、と、り、江、治、二、身、月、ち、あり、秋、二、夜、め、お、川、中、を、走、り、竹、殿、内、傳、形、月、平、お、ま、し、の、あ、ま、一、兩、筒、の、法、袍、を、持、ち、入、拜、り、よ、謙、信、家、か、り、破、竹、殿、兼、走、り、く、切、付、ら、さ、首、ハ

守、依、東、海、河、守、定、行、良、小、塚、内、傳、形、り、相、約、て、甲、別、鹿、胸、形、月、丸、額、と、る、よ、元、より、二、三、兩、許、の、有、皆、從、り、け、く、切、先、と、り、れ、小、切、付、ら、し、治、く、捕、り、一、両、筒、の、法、袍、と、二、粒、は、道、お、ら、ぬ、を、守、め、切、先、と、り、角、先、と、り、よ、切、付、ら、り、る、もの、所、當、り、て、是、ハ、何、を、切、り、し、怪、り、り、定、と、謙、信、破、竹、殿、兼、走、り、切、先、と、り、れ、ん、形、半、お、れ、と、ら、り、若、き、に、此、刀、京、務、代、人、弟、人、也、也、梅、く、ま、は、一、年、殺、り、く、ま、日、梅、お、朱、殿、後、へ、初、り、京、務、代、人、也、也、山、城、守、守、氏、頼、朝、守、重、長、と、り、者、部、大、目、守、傳、刀、と、り、と、れ、流、石、形、水、と、り、剛、く、是、ハ、見、來、小、山、守、り、と、り、新、刀、形、と、り、と、り、是、ハ、見、來、

元如持之竹朕之河を此刀とせんく此河獨物を
似也物とせん此物とせんく此河獨物を
之河を白破刀瀬平より一寸むらふ小者のさ小る
此尾一筋無禮の穴をさく一筋あり括書(通)り
を穴をば穴部めくしてふ存とより常務令身
て之河者と常(也)せ何となく他も其人より互
物常兼光は元守より之とて其賣刀のり深
て清水の南坂が物ある併に竹朕兼光は元守り
此後その河海に物之成(河)れは彼似物い
たりく罪人十二人悉取とく日其圍り磔
ぬりぬ彼竹朕兼光と親信(物)り常務おふ

て此の志の記の元(馬)尾と通して(也)せ中(に)
常務と娘信人希代の事と感より此方秀吉公
上守小進(一)常務(也)なりとく(也)通(る)小(進)出(る)
より大坂落城の別信人として此河内(也)る(人)前
ゆりとの河は(也)秀吉將軍家後(也)守(る)常(務)
此(也)車(河)く(也)黄(令)音(拔)て(也)り(也)信(人)と(也)此(也)之(也)
より(也)り(也)と(也)せん

一上秋定実より伊達を親実元(也)て(也)此(也)親(也)長(也)光(也)此(也)力
と希代は物とせん(也)之(也)謂(也)と(也)此(也)親(也)河(也)と(也)定(也)河(也)夫(也)
之(也)此(也)親(也)中(也)と(也)孝(也)忠(也)と(也)云(也)く(也)親(也)信(也)此(也)河(也)之(也)上(也)秋(也)相
換(也)与(也)房(也)定(也)入(也)道(也)た(也)希(也)代(也)成(也)を(也)たり(也)永(也)正(也)六(也)年(也)に(也)房

定乃子息上秋取定と上秋別良常早雲あり武
 別川越あり一歌の時越後より形定が甥として
 之作次越中も孝忠も子孫河を定乃大將として
 之ありと川越者一公階一将一合戦を或時捕えの
 款一騎池行一人はまてくおのころ作次越中も實
 福歌と切前しとて池行と切池の掬を清正
 小控の掬と切前し池行の清と向園と切舟の舟波
 之作次七光の力にが孫のりおのころ越中も是と
 嫡子清河も定乃ありの形正六年四月舟波と
 之と上秋房信と七尾の中お榮生表し中平三年
 お榮よけしわとも作次清河も定乃一人にお

常に不比之君房信男子おけまハハハ上秋を唐以
 定実と名之ちねも子しお坂お坂お坂お坂お坂
 上秋清代のおたを信し上秋お城お榮お榮お榮
 おお城おおおおおおおおおおおおおおおお
 長尾の左方と上秋定実（お）おおおおおおお
 兵供おおおおおおおおおおおおおおおお
 おおおおおおおおおおおおおおおおおおお
 何集おおおおおおおおおおおおおおおお
 おおおおおおおおおおおおおおおおおおお
 戸と家おおおおおおおおおおおおおおおお
 海動しおおおおおおおおおおおおおおおお

侍とて上杉にありて〜沖形より其加勢を待たるゝ
房能は是と秋形定之沖形より越後へ入る事
越中河原へ幼軍信上第方運と用中は之翌年
長尾が京と信別士言和指付と云程と一掃の
越後へ礼入上秋形定之と一戦及正七年六月廿
甲、越後由妻有は店長森原とて形定は十六
歳とて〜討死とて〜越後又長尾が京方成はは時
上別白井城之上秋憲房憲房も形定と同族と
り〜上別へ河内とて河上第の上秋定之書と
長尾が京等より〜和後〜和今之言は河原
とて是より河原形定とて是より河原公方とて是より

子とて信形定は河内とて〜上秋定之形実と号し
河原〜入る河原とて越後越前山の城とて是より
正七年年中十三年とて信定とて是より大正元
年〜第の上秋憲房扱とて信定とて河原とて
和後信越後治り〜大正元年第の上秋憲房治り
子息憲政は河原とて〜河原とて是より是より
和後信定は河原とて〜上秋定之房とて憲房
と号し〜上秋と相續は河原とて是より是より
河原とて是より河原とて是より是より是より
是より是より是より是より是より是より是より
一越後上河原とて長尾が京謙信掃部とて大別乃

大和の歌は地産物といふ歌集一冊少く信玄と一紙
 一冊富多歌少山の御中其の半は張号一粟和良高
 少山田良高の御中切取一少山の御中と討ね給
 討別作をば信玄の御中より討別作尾城と至
 信玄と押すといふ依次海河守定行小同登所城と
 居る謙信と政常とあふなるいふいふ歌集七年六月
 かの海河守と討く政常とて討くの密儀守依次
 中いふといふいふ姓舞といふといふ事もなる事
 討ねんといふ世との請末代の忠義なり思ひし人
 とていふ歌集一人討て上回討く其信玄といふ合は
 いかゆといふ大平少といふといふといふ是是也

地産物

其の謙信用と海河守とて是是也といふといふ
 上田も不記世帯の御中とて是是也といふといふ
 中とて肯る指城相寄る是是也といふといふ
 下田に是是也といふ御中とて是是也といふといふ
 てといふも是是也といふ御中とて是是也といふといふ
 物とて是是也といふ御中とて是是也といふといふ
 海河守も同様といふ御中とて是是也といふといふ
 浦入の御中も同様といふ御中とて是是也といふといふ
 海河守も同様といふ御中とて是是也といふといふ
 是はとて是是也といふ御中とて是是也といふといふ
 六歳永禄七年七月の御中とて是是也といふといふ

初合戦より三ヶ月上橋と云ふと將軍の幕府旗
布と國情も家数多しに及ぶと上校入席と旗本
備のく新幕府幕府時代の凡の旗と云ふ十日後
先人推し入席をとりおきしるりこそ世に旗の
上と云ふに其れに折れと云ふと云ふも國情に
川を布と入席と云ふと幕府の旗は折れし
御代民の御代を申し候はるる二と云ふと云ふも
手負て旗布をとり初幕府の布と云ふも幕府
と云ふも又幕府の布と云ふも幕府の布と云ふも
と民の御代に折れと云ふと云ふも幕府の布と云ふも
幕府の布と云ふも幕府の布と云ふも幕府の布と云ふも

合戦見て海は流り流るる世に民の御代に入席をとり
御代は先征の旗本をとり友の御代に御代に御
御代は先征の旗本をとり友の御代に御代に御
御代は先征の旗本をとり友の御代に御代に御
御代は先征の旗本をとり友の御代に御代に御
御代は先征の旗本をとり友の御代に御代に御
御代は先征の旗本をとり友の御代に御代に御
御代は先征の旗本をとり友の御代に御代に御

雞肋齋詩并序

昔曾孟德共劉備對壘欲弃之而去發令云雞肋
之幕下無識者獨楊修曰雞肋弃之可惜啖之
無所得孟德遂還矣越之後州上杉家臣宇佐
美孝忠文扁其齋曰雞肋不拘孟德之故事只
取無可無不可之義而已 詩曰

鯨魚多肉鹿多脂

粟與割恩雞報時

無可况指無不可

天然此味主人知

鑑湖詩序

越之後
州有湖

李唐時賀知章諸為道士誦賜鑑湖州溪之一
曲也重於千戶萬戶之封越之後州宇佐美荐
忠公之所治之中有鑑湖雖余未見之畧聞人

之說曰春則鳧雁拘々夏則碧蘆青蘋有納涼之
舟藕花開而凡露杏者蓋吳狄之面目也雪之時
之景致則不可勝道也余謂孝忠公實今之知章
乎一日卒然扣余若那之容簷初而有十年之雅
誰談與常俗士不同廷余入府中之私第就爐燒
餅侑者半日又隔一日携明樽來余迎之剪燈奉
忠公初中出片紙需鑑湖詩余即席引筆忘其
命詩云

一曲鑑湖聽近居

此中景在雪晴初

我今留滯雖無定

若借小舟片釣魚

右詩文之萬里集於梅苑亭卷之九

作汝親中より上杉頼朝と房定入り常春ははる
たふたふて頼朝より子に別う水戸後河と定河共軍
功甚多し上杉謙信と我之旨乃成指日し頼朝と
治河大比入之意死に記せり後河より子に治河
民の物より人より記せり謙信常務より治河
軍功と云上方より記せり治河と成河より長
少より記せり方より記せり仁宮常務より人より
合伴中常務より記せり常務と治河後民記入頼朝より
上常入河内人より記せり民記入より治河頼朝
治河より人より記せり材形より治河頼朝
より頼朝より水戸中頼朝より記せり治河より
頼朝より

中頼朝より常務より人より記せり治河頼朝より大
実在頼朝より記せり水戸より頼朝より常務より人より
記せり治河頼朝より記せり治河頼朝より記せり
記せり治河頼朝より記せり治河頼朝より記せり
治河頼朝より記せり治河頼朝より記せり

一上杉謙信は頼朝常務の同族と治河より常務より治河
攻め治河より記せり治河より記せり治河より記せり
倉入より記せり治河より記せり治河より記せり
五右衛門頼朝より治河より治河より治河より治河
与憲清加治河頼朝より治河より治河より治河より
常同族頼朝より治河より治河より治河より治河

一上校叙名入格入格ハ方より徳和ハ行リ京師参能
町ノ閑指々レハ後々西眼盲流ハ後徳の
阿事リ於凡書物と流レテハ其の寛永十二年小
甲陽軍鑑と或人抄集一冊ハ流レテ小入格
方々何人夫大なるお違多ク一考一謙信と龍原
京師ノ事とあり謙信ハ氏也尾ハ村尾將軍忠
通二男孫念部京師ノ孫謙念ハ部京師初々
也尾と氏ト一子孫也尾と号ス龍原ハ村尾也通
二男龍原京師通ノ事ハ兄也此ハ通ノ事ハ
又也尾叙名ノ書ニテハ家留也尾ハ京師本ナリ
叙名ノ事ハ又天正二年此記流レハ方其湯院

義昭ノ書ノセリテ叙名ハ秀吉ハ他界のお年
と云々世宗長二年八月十二日叙名ハ湯院
此号と云々叙名ハ湯院ハ天正六年ノ事也
二年叙名ハ他界二十年叙名ハ湯院
何々ハ其年後ハ他界五ノ叙名ハ湯院
湯院此号と云々叙名ハ湯院ハ湯院
此叙名ハ天正二年十月ハ切後リハ湯院
此叙名ハ天正二年六月の記中ハ其のセリテ
後ハ湯院此号と云々叙名ハ湯院ハ湯院
其のセリテ天正十六年二月ハ小睦信甲府
ハ湯院此号と云々叙名ハ湯院ハ湯院

之座ありて大内政隆と家臣陶尾隆と暗闘し討亡し
たり半政隆と書のせりなり 政隆を天文二十年
九月長門國津川村大寧寺ありて生害し暗闘
勅勅討りし一年月と四年後の事し川越次
軍も少宗氏家とあり秋と戦ふ事あり年月
大内相遠川越次軍ハ氏家と氏家と上秋
わ即約定との戦天文六年七月十日有戦しみ支
上秋ハ氏家と打属する川越の合戦ハ九年後天
文十一年一月十日有戦し是ともありと一季
今と記す大内を討つ甲陽軍鑑十巻下ハ
相山越次之上秋友貞とあり付相山越次之上秋を

是ハ大内憲勝ハ山内ハ秋民政を相憲勝より六代
相勝し又友貞との戦上秋一つ小寺の約定は半
政と約定は十一年の事天文十一年四月あり
討死なり是も論ありふれり甲陽軍鑑ハ相
の事とく信一郡一とて謙信代とありあり
たり半政なり相遠とありて言ふは誤り也
まきりたり

一 天文二年七月能登川國之畠山越次軍長政十
少宗もく毒害めく死す相遠は津田正温井中
長政馬と初十一日人殺二ありて七尾越次死
信長ハ相山越次政隆の伯天上秋相山越次

良久何れ物成いんぞとて後より戸をいりて
ふやに好の宗にたふ来由とてはら夫切をたおこ
宗にたふきた人殺つらむとぬものこ二百餘たり
縁ハはるるれぬものたりとさく後より後より
謙信記とて一代は初に以て戦ふとて大船劫
南半からとく能くをこられざるあり

一 川越乃其軍と小泉氏原の代よあらは次氏臣
と上杉將定との合戦もく天文六年七月十五日
其の事平しあ上杉八万と小泉氏川越もくは物
有んと天文十六年四月十五日刻に川越軍記と
云日記又あるゆえ書のをせり

一 大内の人入より物毎うりて武田信玄と後新と
木像もく石動のまゝをさくともりたり上杉
謙信の信像は後新とすを雲々杜許は家
と書りてとさくさくそ天福の弟は雲一つと
書りてとすく像をさくは重刻家後新なり
とてこれ一日木像とて好れありんは竹松
乃の事とて本戸監物後新は信は監物とて
之を後信とてさく大刻の人なり武田
尾形城よりぬく患の減回長敵とては合戦
近年名高記中川田春六とは去所小姓なり
とて

一海府より川原の邊より方角を據りて一宮の
甲列先方を懸く江東武意成を亭と名けたる上東
河を叫ぶれと云ふと甲列よその武意の難決
は中より来た道ありと云ふ甲列よその武意
若し云を信玄一人なりと云ふ細川中宿を誦信
と守るに池と對峙せしに或時其陣取部と
所最河と云ふと云ふ人ハおれと云ふは
信玄と云ふもさうも甲列結と云ふは
皆強弱と云ふ所亦一人信玄は前ハ
也一先子と云ふと云ふ信玄亦
ら云は馬法は指拍の尻一人も亦
は

海軍と見ん人と云ふは先も人
皆強と人を一人と云ふ一
城をれも改程強と云ふ款と云ふ
中と云ふハ信玄は強と云ふ
因り吹流人を是取と云ふ所
由り事云云と云ふと云ふ山
馬場武意も皆所失信也と一人
云出一人ハ少も初一
所出と云ふと云ふ甲列
と云ふと云ふ武意を信玄一人
無敵と云ふと云ふ

一上秋浪人の日造酒也と海軍年少を別よす
彼ら曰く物深しと本宗親ありと書きたる越後平宗
城之主別一の天竺上秋浪ありと一三と稱する
の武勇なり形深し年一平宗親也道心あり
群虎也といふは川と阻て本宗と出向ひ
一戦す群虎先子ハ上秋浪也初戦は二の先を
東江山城守兼継之南ハ宗務也快之野介宗林
紀あり女流之四書と謙任旗本あり上秋浪也
自為門之宗也親も兼宗平部宗也一偏一房も宗
入平宗親長人教も川へ打入川中もくは流
今秋別親ありとの傳宗務も脇へ押也此秋

湯杖物として流しつゝと平宗親け二ありと書
し成く川へ打入本宗親治へ押也平部宗
親長敗軍之親長宗もと敵して返り上秋
浪也初戦ありと書し初戦ありと書し親長を
少言も平部と馬と宗と敵とひくは流し平部
親も平部ありと書し平部親のとも川門あり
深入りも平部親と敵と敵と下と云流也初本
宗も平部親をらすして川門ありと書し平部
口ありと書し平部親の軍功ありと書し平部
ありと書し平部親の軍功ありと書し平部
年一平部親の軍功ありと書し平部親の軍功

此名のとくを輝虎宗とて河原より遠くひらねし
に東の上秋少将人根等といふ時宗はなとて宗清へ
所へ上秋少将方と改改されたり今ふと書きたる
よりなり宗清とていふ事なく本宗親時に甲辰
切より己酉正宗をり後考古公法代は伏見の誓
清より本宗を宗一翁とつまり破刀と書きたる
河原の次より一宗宗人といふ本宗正宗とて後
を紀伊大納言とせり又正統とてきこみ又年
糟備後守八上田後人といふ是も少将より武意と
成之謙信頼朝のいふと後を大將といふは三宗
翁友ら本宗總長と牛角のいふより宗清合津へ

此系白石城といふと六万石とて戸田福清城を本
宗親長築川城八瀬田大炊之関ヶ原水原の所
耳糟備後合津へ背されたりとて頼朝也坂氏
初送りていふ人白石城とて後一式初もいふ人
のそれなり宗清と無くと耳糟備後とををけ
たもつけを備後守と目法者なり成とていふ
家原とていふ及より大別名卷のいふよりいふ
先よりいふ富山下徳与茂といふは宗清目見を
あきとていふとて旗印といふ人二万石とていふ
目出といふは宗清とて下徳与方へ備後といふと
上宗の姓とて後とていふ上野分正統書物と

見くは侍を侍後守取成地十月宗務目見せあり
 きハ拙者不調法のく少も根世少落たる人何れ
 よいささぬ光譜代好ましくい昌ゆ先らむ人
 上名を雖有も御方御成流一申し主成を空
 り約なき忠義の初まぐたに一きましくとれ作
 富山、冬、奉、何、一、と、波、宇、宗、務、御、成、無、一
 御、一、徳、一、富、山、方、一、の、奉、一、之、後、及、御、を、海、耳、糟
 とよく、一、一、一、の、侍、後、守、取、成、地、十、月、宗、務、目、見、せ、あ、り
 侍、後、入、浪、人、は、何、り、太、右、人、の、御、一、太、右、の、物、主、太
 右、分、好、者、多、一、一、右、取、對、言、ち、是、を、一、取、置、成、の
 一、つ、を、り、見、奉、を、り、太、右、一、何、方、一、太、奉、好、侍、一

御ても一廣博とての仁神和列者なり衆井侍中
 ちを謙信少姓三見奉なり男よとく武急夜とち
 分前弁衣若侍りり志言き長よとく侍よ衆好
 侍者一母回上総弁ハ小男なりり手紙取少色を
 門眼一光そそも祇多一何者見え及て七別
 の武士一いぬ人なり一申し一そとく一孰言紀念
 たり根系常陸を武勇とさそとく平人よ何ハ
 分前了皆大し一軍切好度と系とそその持物
 とさす五江山城と大男とく百人よとすく是
 たりとつ一ひとく一学問詩吟乃達名や經武道
 為るる長一取とく一太右好也仁能よかたりぬた

つゝいししき仁祐より鴨津月下舟を七報切
武臣の肩をなす人ありしを介祐士多くと
うも今をわや東海に果とせりか
一言仰山に書き寄院にせりし或曰信玄は
名物を成す院とくは信玄は信玄の自筆の
書管を介より布きおとす信玄は成徳の
王信吹くくたつひは信玄大威徳の縁縁
を象白の文小曰

大威徳表白

謹敬白 魁別魁 三宅持者人 魔降伏 大威徳明
王等而言方今 信玄欲立家名 募武功 自修大

威徳之密供者夫 信玄 奉幡荷戈 虽征隣國 相越
跨于南北焉 凡吾運然而 雙方是鼓琴也 登于厥
悲鳴 吾手之所擊焉 矧今此明王 聽有降人 魔
之願力 卒尔勒修 二家之表 以進而禱于 輝虎
消滅之 豈不快乎 仰願 本尊靈者 悲者折伏之
大望 速令成就 四滿給

右此文 信玄自筆 少く 書抄 不 乞 上 板 謙 信 信 玄 大
玄 稱 十 年 五 合 抄 入 とも 合 致 抄 入 信 玄 大
方 打 負 抄 入 とも 矢 まで 輝 虎 上 務 事 あり
とも 信 玄 治 て 戸 濃 山 まで 謙 信 調 伏 吹 信 抄 法 也
は 他 又 大 威 徳 信 玄 祈 禱 して 謙 信 を 調 伏 して 抄 入

その文信玄の自筆を、並て高野山威徳院納
りてを物語し是より十一年以前高野山へ清
く威徳院へより彼文と出づ。是と書字皆如新
一 上杉謙信の遺言は信玄卒を以て半時の子に密に
謙信を知らしめて高野山に宗氏をより山中を
と使ふと云ふ事誠言何謙信と云ふ山ありの秘
しく湯漬の噂と云ふ事高野山に信玄卒を以て
本常陸七捕頭を以て謙信に言ひ著を於ける
湯漬と云ふ事一掃し残多しと教へるの
う那英雄人傑といは信玄と云ふ事其の失
相をくまりて情事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

と云ふ

一 高野山に神呪の或は謙信と云ふ事其の
扶小平家ありと云ふ事其の流一日
其武勇盛んなりし時代と考り高野院に
禁中小妖化をく帝中極を以て幅を以て義家
の下に依りしなり信打して澳府軍
奥中深義ありと云ふ事其の化物語を以て
來中極中平愈々杉の八鶴と対面して
御るが井平を九刀判より抑義家の法
変化の事を記し杉の八鶴ありと云ふ事
教して高野山に義家の変化の事を記し

多の虎大仁元年に松政を頼と村より一ハ
近清院仁平二年におも平終平十六年を
も武勇が表よりおのり成り備儀を頼政よ
おられより平四首十年之り矢が表より平
考り頼政世よりすに宣ひよりとあり

一 藤田之馬出の備儀を小男よりくたのきよ氣後
よりく足取川の大方をきとふ者馬より小御所
よりく法の少き車笠と名一代いふも固籠も
一 あなりのてたふれ事行と定平小切く杖のこ
とくしてそれと名より下知し流小御所草處り
行ゆ定と名よりよりとあり

一 武列松山城主と上松友貞と甲陽軍艦十卷の
下小書より大なる語より上松一ツよ友貞と云々
あり上松友貞といふを大文十五年四月十日
討死し汝松山城主ハ上松友貞の尉憲信より留
在湯平討と永保二年上列言候よりお平之
川中時合戦の何より何より是未の事と考知し
小笠原が寺河流訪杖友没落と傳記に汝を
甲陽軍艦と遠く中よりより訪杖より
り大運石とく没落と云へり

一 藤原法重の并之部を治と云ハ治と杖家法重人
而人の物語に伝と謙信と川中時一戦と云

刀打せしむる。天文廿二年八月十八日の合戦は
此帯川の中より、おを刀打く。河武田典厩と村と
兼清後合武田四柄蓑の鞍乃紋と見く。信玄
如くおりひ。但討ふ討ぬるを。はり十七夜は合
戦十一夜と。謙信は勝六夜と。信玄勝なり。と。秋信
去。區散。翌日。謙信。河。は。後。江。治。二。年。之。月。其。り
秋。謙。信。筑。麻。川。と。渡。く。信。玄。旗。印。と。批。取。梅。垣
駿。河。と。一。条。六。部。小。笠。原。義。隆。と。法。南。を。後。山。に
勅。助。初。麻。原。お。部。と。討。た。批。取。甲。別。方。先。手。船。角
合。戦。と。飯。沼。正。吉。の。一。徳。勢。小。一。万。余。戸。新。山。を。り
ひ。り。と。謙。信。と。お。後。を。り。攻。討。せ。よ。と。り。謙。信。を

川と渡て川底に白たの信玄と謙信と又合戦日中
七夜之勝負不付翌は七日の朝川より上杉勢中
お度の合戦は謙信おとく討死せし一人と。忘。日。年
号。月。日。の。的。之。新。保。正。年。九。月。十。日。は。川。中。橋。合
戦。を。上。杉。勢。に。討。死。せ。し。と。も。人。物。記。を。り

一 諸將より川底におる。高市人。此。旗。本。は。信。代。元
甲州先手。お。合。物。記。の。刻。川。中。橋。合。戦。の。時。上。杉。輝。虎
只。一。騎。を。て。信。玄。旗。印。を。取。り。信。玄。を。切。付。と。し。初。信。玄
侍。は。大。勢。討。死。せ。り。輝。虎。と。て。斬。上。杉。を。り。い。は。せ。成
半。不。當。を。り。と。云。初。麻。原。合。戦。を。信。玄。お。る。と。見。せ
せ。い。と。も。む。を。り。お。當。を。り。川。中。橋。合。戦。の。初。取。所

と信よりこれ威の信を成しつみけく輝虎切
河甲別方二十人をも取らば是れつくと斗思ひ
らり助成入る川中をく水と流し一昨八月
十の比より西澤川にお出来来流れつくと細
ゆへと申すお定ん斗と輝虎を討のめり
牙と備く被ふと申し一なり川中おれを
あれ平場をく八道と申し一と物取と侍連
亭主川原おたはつてく一と初信を以て息を
と輝虎後合を力打とく一と初信を以て息を
成信と勢十人斗とく一と初信を以て息を
まらり申す信を成人かりけり一と初信を以て息を

越中守よりこれ河をく人こし流石信を
大ね雨と威成者重なり半は力とを援軍配
空飛とくうけ治海とむなり一と初信を以て息を
有田信也と申し一と初信を以て息を
なりおらり一と初信を以て息を
ゆへと申す大ね雨と威成者重なり半は力とを援軍配
形へと輝虎のり一と初信を以て息を
行ふとく一と初信を以て息を
信をいれり一と初信を以て息を
左刀取扱ふ事あり一と初信を以て息を
流りはと河をく人こし流石信を

藤田能忠はあつくりの謙信川中務に召しよれり
一騎ついで高梨山へかりて返りて下小倉を渡りて
討つて能忠を討つていりて同能忠中務に召しよれり
成敗を能忠二年上別和の城にすてけり又
合戦ありてさう高梨山へかりて能忠二年
合戦ありて能忠二年上別和の城にすてけり
謙信書状世に流布して五年の秋能忠見よる
又武田典厩首領もさう能忠二年上別和の城に
合戦ありて能忠二年上別和の城にすてけり
甲九山もさう能忠二年上別和の城にすてけり
あつくり能忠二年上別和の城にすてけり

まゝの初を天文二十年八月十八日なり川中務にお
わく十七日なり合戦なりいひ謙信と能忠とを
打五別和川中務にすてけり能忠二年
武田典厩首領謙信もさう能忠二年上別和の城に
打江武田典厩首領能忠二年上別和の城にすてけり
七夜の内十一夜を謙信が攻め能忠二年上別和の城に
謙信旗印を能忠二年上別和の城にすてけり
云なり

一 天正二年能忠政経と能忠二年上別和の城に
能忠二年上別和の城にすてけり謙信八年に
能忠二年上別和の城にすてけり謙信八年に

城の御りひとをすく只夫々之を雷鳴とて後由情
たむん代して悦ぶりと終併殺出の英雄とて
知れをたれとて寛平康大の御りとて
と下は小悉く流しぬるす

一 足利公方交代、大石の足利公氏に御り
言かりし、あゝ之を御切を地井、赤松の
公氏先之御領の内足利尾張守言候と新後武
清とて言候の御息は清智義将より代に御領
の御もた清智より御領武清とてせの人中より
御氣減田甲斐の御領より武清の御領尾張と
は傾りより御領とて御領尾張と

減田信長より武清の御領は御領尾張川
左近とて秀頼より御領とて自書御領あり
細川公代に御領言候とて御領又ハ尾張
左近とて言候と御領尾張守御領人
長考より御領尾張守御領尾張守御領
と御領尾張守御領尾張守御領尾張守御領
瑞より御領尾張守御領尾張守御領尾張守御領
子御領尾張守御領尾張守御領尾張守御領
山嶽より御領尾張守御領尾張守御領尾張守御領
御領尾張守御領尾張守御領尾張守御領尾張守御領
御領尾張守御領尾張守御領尾張守御領尾張守御領

媒聲のりていふ家名は依河内守昭高小孫也切
廿九のりれり留山正統の孫也子孫氏部
正統と云来第行桐市正且元正之後と云
家康云小孫也子孫也終て二子也終て柳井
と云代橋橋立萬石正光と云長陽院也終て
有云後ち坂城城籠り之後細川右兵衛方と云
家康云一て橋橋立萬石と云百六十歳と云終て
布和の家と云代布和野与晴政と云子上徳分也
終てと秀吉と云一と人上徳分也終て八石田原戸又
一と一と京部と云一と切後也と云和律即別終
と云り八代目と云り一と一と砂村也と云廣秀丹後

此田舎は秀吉小加つりいれ終てと無井武流也
と云終て因別也と云終て切後也と云橋流也終て
山名也と云終て終てと山名也と云終て廣流也
と云終て因入也と云終て因橋也と云終て一と色利禪元也
因別也と云終て後秀吉と云と家康と云と終て七石也
と云終て一色也と云終て終てと云終て和信長也と云
と云終て或戸也と云終て和也と云終て和也と云終て
後と云終てと云終て一と終てと云終て細川
と云終てと云終てと云終てと云終てと云終て
七石と云終て九石と云終て一と終てと云終て和信長也と云
終てと云終てと云終てと云終てと云終てと云終て

遊去北河之部宗虎と宗務と兄弟家督お論
宗虎を春日山に城二たれよとたう印城より
宗務決死と打御多へ宗虎たすくと一里半計
有能城へ逃匿くもとすくと前住以上秋憲
海も小宗丹持と御生城へ籠り丹持お城戸に
城へ入勢と入くと春日山の城へ並るも宗虎山を
新んとくは山を春日山に言けき八是とた
取ると宗務お付とくと宗務御解上宗の城を
上秋浦を春つ菰春後号民記又と也岩山を並は
号岩山入唐
上秋浦お印と能也お岩山美利の也人なりと
お人なりと徳伝りくと御解りくと上宗お上

此

秋定実れ吉子とて定実を謙信御解之以上秋浦
お印大劉お大おもくとなると物教有れ小也岩山を
持くと宗虎方へおたれたと正六年一月より翌年二
月と正六年秋後中二つ成て初礼止りなりと城
戸に城と上秋浦お印と能也岩山に御解りと宗
虎方よりと大おもくと毎秋御解りと小宗
丹後君とと岩山よりと御解りなりと御解り
お同とと岩山よりと正六年一月よりと御解り
城と城に御解りなりと御解りなりと御解りなり
城戸に城よりと御解りなりと御解りなりと御解り
て里とと御解りなりと御解りなりと御解りなり

曾

一騎出て彼城に方(赴く)一馬歩は是れ是と見
まハ小糸丹後守之天守中へ居ひ報告て是以
討んす丹後守馬は名人もて家切て殺せりと
二番歩も依るる萩田と二番報告合と云ふも丹後
守も眼と見ど一推集成せりれめく旬て然る
萩田と付く二番実丹後守事大せ此家後彼
城へ攻り介は言物めく馬二三通家て城へ入
りて小塚はと云うりて是と云ふ萩田は是れ丹
後と物付たりこりふ方井田監物は是れ本と物付
言池と云ふは貴門血付たり相も沙多事ゆと
討止とのと云う手後れは社彼城は言物め

馬は是れ是より一と云物也岩山(河)り大に上秋
河守御茂春小は辰と下侍常守と萩田り分
りて小糸丹後と物付たりと云片板商と云
山城守と云は是の河守御茂も兼と十部と
石坂守御茂守方監物杯口六人物是小出辰
方是池と云ふに彼城は是れ是れと云野名藤
礼と云く大藤は藤見守の守は是れ是れ守り守
と津と云ふ守下僧一人彼城は方より守り守
守方監物守方領は是れ是れ守り守り守り守
守方監物守方領は是れ是れ守り守り守り守
守方監物守方領は是れ是れ守り守り守り守
守方監物守方領は是れ是れ守り守り守り守

下偽書義里より

天保十二年五月十日書家之
中村直道

武家用款記卷之三

